緑化樹木の情報誌
緑化通信
2017 新年号
（年7回25日発行）
第455号

発行所
一般社団法人 日本植木協会
〒107-0052　東京都港区赤坂6-4-22　三沖ビル3階
TEL.(03)3586-7361　FAX.(03)3586-7577
URL：http://www.ueki.or.jp/
E-mail：honbu@ueki.or.jp

購読希望の方は上記宛へお申込み下さい。年間購読料　5,000円

年頭のご挨拶

一般社団法人　日本植木協会
会長　宍倉　孝行

新年明けましておめでとうございます。

平成29年の年頭にあたり、謹んでご挨拶を申し上げます。

会員の皆様方におかれましては、平素より協会の事業活動に対し格別なご指導・ご協力を賜り心より御礼申し上げます。

また、昨年の熊本大地震、鳥取地震、台風等の自然災害により被害を受けられた会員の方々に対し、重ねてお見舞いを申し上げます。

日本植木協会は、一般社団法人に移行から早や5年目を迎え、公益目的支出計画に沿って着実に事業を遂行してまいりました。昨年は、公益目的事業である環境緑化樹木識別検定事業及び植生アドバイザー育成講座事業に会員のみならず多くの一般の方々にも参加をいただきました。今年も多くの方々に参加いただけるよう受講内容の更なる充実を図り、事業を進めるとともに、資格を取得した方々が緑化や植生復元などの社会的ニーズの高まりに応えるための活動の場作り、環境整備に努めて参りまいりたいと考えています。

また、子供たちにみどりの大切さを教えるための「緑育出前事業」に注力し、記念樹等贈呈事業とともに全国的に展開して参りました。昨年は、（公社）国土緑化推進機構から助成金を頂き、小学校等における出前事業のほか、東京お台場、福岡県小都市において開催された緑化イベントにおいて、児童や市民に対してこけ玉作りなどを通じて「みどりの大切さ」などをアピールして参りました。

今年も、子供たちはもとより、市民、地域の方々に幅広くみどりの大切さを伝えるための取り組みを行って参ります。

昨年は、北海道・東北ブロックの会員を主体に、関係機関、団体のご協力を頂き石巻復興祈念公園の試験植栽樹木の納品ができました。今後の本植栽に向けて関係機関と連携を密にして祈念公園工事に植物生産団体として貢献し、被災地の一日も早い復興とみどり豊かな街づくりに貢献して参る所存でございます。

リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックが終わり、いよいよ東京オリンピック・パラリンピックが開催され、世界中から多くの人々をお迎えすることになります。日本の伝統的な樹芸文化、最新の緑化技術により緑に満ちた街や地域を紹介するとともに、次世代へのレガシーとして残していく必要があります。これから、競技会場、インフラ等の環境整備事業が本格化してきます。開催地のみならず各地域において、みどり豊かな街、地域を実現する緑化樹木等の需要が増えていくものと希望しています。

本協会ではこのような社会的ニーズに応えるため、より実態に即した緑化樹木生産数量の在庫管理を行い、業界内外へ情報発信するための事業を積極的に展開していくことが急務となっています。

経済に明るい兆しも見えてきましたが、本協会を取巻く環境は、会員及び生産数量の減少等依然として厳しい状況が続いていますが、新しい生産技術の開発、流通の円滑化を進め、積極的に新たな取り組みも積極的に推進して参いる所存でございます。

また、昨年は、NHK出版社「趣味の園芸」の編集・協力を得て本協会のカレンダーを作成いたしました。今年も、昨年同様に「趣味の園芸」とともにすばらしい樹木や花を紹介したカレンダーの作成に取り組んでまいります。

今後とも、関係機関・団体等との連携を一層密にし、会員の皆様とともに、樹木生産・流通を通じ環境保全や新しい街、地域づくりに参画し緑化推進に貢献して参る所存でございます。引き続き、格別のご指導・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、会員の皆様、関係各位の益々のご発展とご健勝を祈念し、年頭の挨拶とさせて頂きます。

新年のご挨拶

一般財団法人　日本緑化センター
会長　進藤　清貴

新年あけましておめでとうございます。

一般社団法人日本植木協会、ならびに会員の皆様方におかれましは、清々しい気持ちで新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年を振り返りますと、ブラジルのリオデジャネイロでオリンピック・パラリンピックが開催され、日本人選手のメダルラッシュに日本中が歓喜に沸いたことが印象に残る一年となりました。次は、いよいよ東京オリンピック・パラリンピックです。緑豊かな東京を世界にアピールできる絶好の機会でもあり、大会を盛り上げることができるように様々な緑化活動に尽力して参りたいと考えているところです。

また、昨年末には、一昨年末にパリで開催されたCOP21において採択された気候変動抑制に関する多国間の国際的な協定であります パリ協定が発効いたしました。パリ協定は、京都議定書以来18年ぶりとなる気候変動に関する国際的な枠組みであり、本協定を着実に実行するためには、温室効果ガスの吸収源対策としての森林等の整備や都市緑化の推進など、これまでに以上に緑化の取り組みを推進していく必要があるものと考えております。

ご承知のとおり、日本緑化センターでは、こうした課題に対応した幅広い緑化を推進するため、緑化に関する人材の育成、技術講座・研究会の開催、情報の収集・提供、普及啓発などさまざまな分野にわたる事業に取り組んでいるところでございます。

昨年実施した当センターの取り組み事例から代表的なものを挙げますと、緑化に資する人材育成のひとつとして取り組んでいる樹木医養成認定事業につきましては、新たに108名の樹木医を認定することができました。これまでの累計でみますと2673名の樹木医が誕生しており、全国各地で様々な緑化活動等に活躍していただいております。

また、道路や都市公園等の公共空間に樹木が植栽されるようになってから長い年月が経過し、樹齢を重ねて大きく育った樹木は、腐朽の発生等に伴う倒伏や落枝による事故の発生リスクが高まってきております。こうした課題に対応するため、当センターでは、様々な調査研究や講習会の開催等を通じて、樹木の点検診断などに関する検討を行っているところでございます。

さらに、当センターでは、我が国固有の緑の文化を育んできた松林の保全再生に取り組んでいるところですが、東日本大震災からの復興に資する取り組みとして、岩手県陸前高田市の高田松原について、地元組織と協力してその再生を推進しているところでございます。松保護士の資格認定とあわせて、今後とも、松林の保護育成に積極的に取り組んでまいります。

このような緑化を総合的に推進していくためには、多くの緑化に関わる団体と連携を図りながら、着実に成果を上げていくことが必要でございます。とりわけ、当センターと関連の深い日本植木協会とは、引き続き緊密に連携を図りながら様々な社会的ニーズに対応した事業活動を進めて参りたいと考えております。

結びに、本年が皆様にとって実り多い年となりますことを祈念いたしまして新年のごあいさつとさせていただきます。

中木として今後期待できる樹種「ヤマコウバシ」「シラキ」

古賀　隆博
㈲総合緑化コガキュー・福岡県）

山々の中腹に黄金色に黄葉する「ヤマコウバシ」は、クスノキの中間で、山の彩を揃えています。

その前には、「シラキ」が鮮明な濃紅色の紅葉で山々を彩っています。

両木共、生育では他の緑化木よりやや遅いが、単木でも株立でも素晴らしい樹形を作り、自然な育ち形でそよ風に枝葉は靡き、素晴らしく良い樹です。

今後、東日本～九州まで多く緑化木、庭園木で利用できる有望種と思われます。

国土交通大臣表彰（建設事業関係功労）を受賞

有限会社　浅中錦松園（鳥取県）　浅中　茂 氏

当協会会員である（有）浅中錦松園の代表取締役の浅中茂さんが、平成28年度の国土交通大臣表彰（建設事業関係功労）を受賞されました。

氏は、伝統・技術を活かすだけでなく、地域に調和した緑化による環境整備に取り組み、従業員の指導育成にも力を注ぎ、優秀な人材を輩出するとともに、（一社）鳥取造園建設業協会の副会長として、経営・技術力の向上を図るため、業界の指導者として緑化事業の推進に尽くした功績が認められ受賞された。

なお、平成28年度国土交通大臣表彰式は、７月11日（月）国土交通省（中央合同庁舎３号館）にて開催された。

新年のご挨拶

林野庁　森林整備部
整備課長　小　島　孝　文

平成29年の年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

一般社団法人日本植木協会並びに会員の皆様方におかれましては、清々しい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

また日頃より森林・林業行政について特段の御理解・御協力をいただいておりますこと、また、苗木生産技術の高度化、苗木の安定供給に向けた御努力に対し、厚く御礼申し上げます。

昨年は相次ぐ台風の上陸や熊本や鳥取地方で発生した地震等により、全国的に甚大な自然災害が発生しました。被災地の皆様方には心からお見舞いを申し上げます。林野庁といたしましても、山腹崩壊や風倒木等、多くの災害が発生したことに対し、各関係機関と連携しながら被災地の早期復旧に向けて全力で取り組んで参ります。

さて、我が国の森林は、戦後造成された人工林が本格的な利用期を迎える中、地球温暖化の防止や水源のかん養等、森林の多面的機能の維持・向上を図りつつ、豊富な森林資源を循環利用し、「林業の成長産業化」を実現することが重要な課題となっております。

また、地方創生が我が国の大きな課題となっている中で、国土の7割を占める森林資源を循環的に利用し、地域にとって持続的な産業と雇用を創出する林業の成長産業化は、森林・林業関係者のみならず国民の皆様からも大きな期待が寄せられています。

このため、昨年5月に森林法等の一部を改正し、制度的な枠組みを整えるとともに、6月には森林・林業基本計画を新たに策定し、今後の取組の展開方向を示したところです。こうした中で、増加すると見込まれる主伐後の再造林を確実に遂行していくためにも、様々なニーズに応えながら苗木を安定的に供給することが不可欠な課題となっています。

とりわけ、コンテナ苗については森林施業の低コスト化の観点から注目されており、林野庁といたしましてもその普及に向けて、コンテナ苗を低コストで大量に供給する生産施設等の整備を支援しているところです。コンテナ苗は、これまでの裸苗に比べ、植栽作業の効率化、植栽時期の拡大などが期待できることから、低コスト化に向けた伐採から植付までの一貫作業システムの推進に向け、その普及は欠かせないものと考えております。

さらに花粉症対策苗木の導入の推進といった喫緊の課題への対応や、早生樹の導入等、新たな苗木需要の兆しもみられるなど林業用種苗についてはこれまでの低迷を脱し、需要の増加が期待されているところです。こうした状況の中、時代に見合ったよりよい苗木の生産に向けては、貴協会の高度な知見と技術での貢献が重要であり、林野庁といたしましても貴協会と一層の連携を深めつつ、林業の成長産業化の実現に向けて取り組んでまいりますので、会員の皆様におかれましては、種苗の安定供給のためにさらなる御尽力と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

末筆になりますが、貴協会並びに会員の皆様の益々の御活躍と御発展を祈念申し上げまして、年頭の御挨拶とさせていただきます。

新年のご挨拶

農林水産省　生産局　園芸作物課
花き産業・施設園芸振興室
室　長　綱　澤　幹　夫

平成29年の年頭にあたり、謹んで新年の御挨拶を申し上げます。

一般社団法人日本植木協会及び会員の皆様におかれましては、平素より花き産業及び花きの文化の振興に御尽力を賜っていることに対し、心から感謝を申し上げます。

平成26年に花きの振興に関する法律が施行されて以降、農林水産省におきましては、法律の理念の実現に向けて、国産花きのシェア回復と輸出を含めた需要の拡大を関係者の皆様と一致団結して進めてまいりました。

このうち、植木につきましては、その美しさが本物の日本庭園を求める富裕層に評価され、中国や欧州からのニーズも強く、盆栽と並ぶ花き輸出の柱となっております。昨年は、5月に策定された「農林水産業の輸出力強化戦略」に基づき、ツゲ、イヌマキ、キャラボク、マツ等の効率的な隔離栽培や消毒方法の実証、外国人を対象とした植木の管理方法に係るセミナー、イヌマキに代わる新商材としてのツゲ、カエデ、マツ等のプロモーション等の活動にオールジャパンで取り組んでいただきました。

また、トルコ・アンタルヤで開催された国際園芸博覧会では、福岡県や千葉県の植木の展示及び剪定・根巻きのデモンストレーションを行っていただき、好評を博しました。これらにより、日本国政府の屋内展示は「金賞」を受賞することができました。会期中に交流したトルコの植木業者が来日し商談を行うなど、本博覧会がトルコをはじめとした中東地域や世界の方々に向けた植木の輸出拡大につながる事例も出てきたほか、今後、両国の業界関係者が相互に訪問する予定があるとお聞きしております。

これら一年間の関係者の皆様方の活動に改めて深く感謝申し上げます。

本年は、早速1月に「IPMエッセン」での植木展示、デモンストレーションがあります。2月には、生産者の関心と期待が極めて高い植木の線虫対策として、農研機構及び産地の試験研究機関で構成する地域戦略（植木類輸出促進）コンソーシアムが取り組んでいる3か年の実証研究の技術交換会等に参画いただくこととなっているなど、昨年にも増して、日本産植木の外国へのPR、販路開拓、輸出環境問題の解決等に向けた取組が予定されており、農林水産省としてもこれらの活動を推進してまいる考えです。また、資源の枯渇が懸念されているイヌマキ等については、大型挿し穂の利用や育苗時の肥培管理の工夫による育苗期間の短縮等の実証を進めるなど、国内生産体制の強化も進めてまいる所存ですので、皆様の引き続きの御支援、御協力をお願い申し上げます。

さらに、オリンピック・パラリンピック東京大会の関係では、貴協会として「花と緑のおもてなしプロジェクト」に参画され、大会を見据えたガーデンづくりに既に取り組んでおられますが、このような取組を継続され、平成32年に日本産の植木によるおもてなしが実現することを期待しております。

結びに、本年が皆様方の益々の御活躍と御発展の年となりますことをお祈り申し上げ、年頭の御挨拶とさせていただきます。

平成28年度 第5回理事会を開催

11月16日（水）13時から協会会議室において理事13、監事3名及び事務局出席のもと秋山冨士雄副会長を議長代理に選出し、第5回理事会が開催された。

議事の内容は次の通り。

○平成28年度の予算執行状況

事務局から平成28年度の予算執行状況について説明。平成28年度は新たな事業としてカレンダーの作成を行ったことからその経費支出が増えている。国土緑化推進機構から「緑と水の森林ファンド」助成金を貰い、緑育出前事業の経費に充当した。また、現在までに12社園の退会があり来年度の会費収入が厳しい状況になっている等の説明があった。

○平成29年度の事業計画及び各委員会からの予算執行計画

各委員会から要求に基づき事務局が作成した平成29年度予算執行計画について審議した。理事から予算計画は平成28年度予算額ではなく決算額でないと比較できないのではないかとの意見もあったが、各委員会からの事業執行計画を尊重し事務局（案）でいくことが承認された。ただし、各委員会においては事業遂行にあたり経費の見直しを行い削減に努めることが求められた。

○東日本震災復興関連事業

石巻復興祈念公園にかかる植栽については、本植栽に向けての試験植栽が28年度に実施され、今後の本植栽に向けて関係機関と連携を密にして祈念公園工事に植物生産団体として貢献したいとのこと。

○名木認定

担当理事から、今年度は「カイズカイブキ」「ウバメガシ」「クロマツ」の3点の申請があり、9月17日に現地調査を行った結果、いずれも名木に相応しいものであり認定するとの報告。

○平成29年度通常総会

ブロック担当理事から、通常総会の議事次第、表彰者及び招待者等について説明があり承認された。また、視察場所となる牧野植物園が紹介され、入場引換券が入手して、総会出席関連書類に同封するとの報告もあった。

○カレンダー、クリアファイル

事務局からカレンダーについて、作成部数が8,300部であったと報告され、また、新樹種部会が作成したクリアファイルについては、会員に普及・販売を図るため総会資料にクリアファイルと申込用紙を同封することにした。

○アボック・カルタ賞等

選考委員会から第9回アボック・カルタ賞に岡山県支部の國忠征美さんに決定したと報告があった。

また、緑育出前事業において新たな取組み等で貢献した、福岡県支部を特別功績表彰したいとの提案があり承認された。

○今後の協会運営の在り方

今後の協会運営の在り方についてフリートーキングを行った結果、次のような意見があった。

・平成31年度をもって公益目的事業計画が終了するが、人材育成事業は公益事業として継続していく必要がある。

・植生管理者は、樹木医等と比較すると非常に少なく資格者をもっと増やしていくことと、資格者が活躍できる場所を確保していくべきである。

・会員の減少により財政的に厳しいものがある。収益事業を考慮することもいいが保障されるものではない。

・委員会の合併、委員会役員の削減・回数の見直しなどを図り、経費の削減に努めることが重要。

・植生アドバイザー研修、識別検定等の受講料の検討。

・協会に入会している会員のメリットを明確にしていくべきである。

などの意見が出された。これらの意見を踏まえ、現執行部任期中に協会の在り方についての方向性を示してみたいとのこと。

新年のご挨拶

国土交通省　都市局公園緑地・景観課
緑地環境室
室長　古澤　達也

平成29年の年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

一般社団法人日本植木協会並びに会員の皆様におかれましては、つつがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。また、平素より国土交通省が進める緑のまちづくりに対し、多大なるお力添えを頂いておりますこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

昨年末、気候変動枠組条約締約国会議（COP22／モロッコ　マラケシュ）、生物多様性条約締約国会議（COP13／メキシコ　カンクン）と、地球レベルの環境問題に関する2つの国際会議が同時期に開催されました。いずれも、人間を含めた生き物の生存基盤である「緑」と密接に関わる問題ですが、一昔前には各国の合意形成すら困難なこれらの事項が、環境問題に対する国際社会の認識の高まりを受け、今では当たり前のように議論される時代になったことを象徴する会議でした。

一方、わが国の都市の緑に目を転じると、都市の緑の中核となる都市公園は、未だ大都市部では不足気味の地域があるものの、全国的には一定のストックが形成され、それらをいかに活用・更新していくべきか議論され始めています。

歴史をひもとけば、都市公園が本格的に整備され始めたのは高度経済成長期でした。当時の三大都市圏では毎年100万人も人口が増加し、それらの人々向けの宅地開発により緑や農地が急速に失われ、「緑」の大切さが認識され始めた時期でもありました。開発により失われる緑をいかに残すかという課題とともに、公園の少ない旧市街地や新市街地における計画的な公園整備の必要性も高まり、昭和47年には都市公園整備五箇年計画に基づく本格的な都市公園整備が開始されるわけですが、都市公園の本格的整備には、予算の確保とともに材料の安定的供給が欠かせません。このような時期に（一社）日本植木協会におかれましては「緑化樹木の生産量調査」（昭和50年～55年）を開始いただき、緑化工事の材料となる樹木等の安定的生産・供給・流通に多大な貢献をいただきました。そしてその成果は、公共事業における緑化の品質確保や安定的な実施に極めて重要な役割を果たしている「公共用緑化樹木等品質寸法規格基準（案）」に結実し、現在に至っています。

近年では、大都市における再開発事業などでも質の高い多様な緑が創出される事例も増えてきています。緑は人間生活に求められる本来的な価値を有しており、まちづくりの「環境価値を高める」ことが経済諸活動においても市民権を得てきている現れと考えることもできるものです。また、少子化・高齢化がさらに進めば、生活の中に「緑」があることは、豊かな人生を送る上で欠かせないものとなってくるでしょう。このような多様なニーズを支え、高質な緑の生産・流通を手がけられる貴協会の取り組みが今後とも益々充実・発展されること、あわせて会員の皆様の益々のご健康を祈念し、新年の挨拶とさせていただきます。

新年のご挨拶

環境省　水・大気環境局
大気生活環境室
室長　行木（なめき）　美弥（みや）

平成29年の年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

一般社団法人日本植木協会及び会員の皆様におかれましては、平素より、豊かな緑を通じた環境保全行政の推進に多大なご尽力を賜り、心より御礼申し上げます。

緑は環境保全において欠くことのできない重要な構成要素です。植物が育つ際に二酸化炭素を吸収・固定することは、気候変動防止の観点から重要な働きであり、いかに森林破壊を防ぎ、健全な森林を増やしていくかということは国際的にも重要な課題となっています。近年ゲリラ豪雨など極端な気象現象も頻度が高くなってきておりますが、防災への貢献という意味でも森林はますます重要となっています。また、樹木は日射を遮り、蒸散効果も相まって、都市の温度や人の暑熱ストレスを和らげます。つまり、ヒートアイランド対策という意味でも大きな効果をもたらします。さらに、森林は様々な生き物の命を支える場でもあり、生物多様性の保全という観点からも極めて貴重な資源です。

豊かな緑には、人々の生活環境を豊かにする側面もあります。街の魅力の表現に緑の多寡はよく使われるところですが、豊かな緑や花々の彩りは視覚的にも私たちを楽しませてくれます。また、植物は嗅覚を通じても私たちの暮らしを豊かにしてくれます。万葉集などに詠われるように日本人は古来より植物の香りを愛で、香りを通じて季節の変化を感じることなどにより生活に取り入れてきました。休日には森林浴を楽しむ方も多いと思いますが、植物の良い香りは即効的な癒しの効果があり、健康増進に役立つともいわれます。

環境省では、貴協会の協力も得て、まちづくりに「かおり」の要素を取り込むことで良好な香り環境を創出する地域の取り組みの促進や、良好な香り環境により清涼感や心安らぐ空間・季節のうつろいを感じられる空間を創出することなどを目指し、「みどり香るまちづくり」企画コンテストを実施しています。平成18年度に開始したこのコンテストは、今年度で11回目を迎えることとなりました。審査にあたっては、住みよい香り環境の創出や、周辺の自然環境・景観等への配慮、地域の人の関わり等も配慮し、総合的に評価を行っており、これまでに多くの優れた企画が全国各地で選ばれております。昨年は10周年を記念し、過去の入賞企画を対象に、企画を実現し特に優れた取り組みを継続的に行っている事例に「みどり香るまち」大賞を授与することといたしました。審査の結果、大賞は高崎市の（独）国立重度知的障害者総合施設のぞみの園に授与されております。

環境省といたしましては、引き続き、より良いかおり環境の創出等環境保全の推進に努めていく所存です。会員の皆様におかれましては、緑を通じた環境保全活動にさらなるご尽力とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、貴協会並びに会員の皆様方の益々のご活躍とご発展をお祈り申し上げ、私の年頭のご挨拶とさせていただきます。

地方かわら版

「緑育出前授業」

古谷　孝行
（フルヤ緑販株式会社・茨城県）

平成20年から始まった緑育授業は、もう8年が経ちました。そのころ小学6年生だった娘も今は大学生になり月日の経つのも早いものだなと感じております。そのころからほぼ毎年、地元の小学校で緑育出前授業を開催させていただいております。

ありがたいことに、いつ小学校に遊びに行っても「植木の先生」と子供たちは言ってくれます。授業の内容は、導入部分で「世界一の樹木たち・日本一の樹木たち」を紹介することで子供たちの興味を引き付け、中盤には「樹木の食べ物や栄養吸収の仕方・枝葉や幹の成長の仕方」など樹木の成長の仕組みを学び、締め括りに「植木とともに生活していること・自然とともに共生していること・緑の大切さ」などを説明いたします。その後子供たちと一緒に校庭に出て樹木を観察して回ります。「植木があることで日影ができて涼しいことやみんなが歩く土の下に根があること」など「耳で聞いて、目で観察し、手で触る」ことにより教室の中の授業よりはるかに集中力が上がります。

その後、子供たちは授業で習った「木陰の大切さ・土の中の根の働き・落葉の役わり」などを、お昼休みの時間に校内放送でお話ししてくれたり、校庭の木の下で下級生に植木の大切さを伝えてくれています。小学校では4年生のカリキュラムに環境教育があり、この時間を緑育出前授業に充てていただいています。子供たちも遊びながらではありますが、植木に対する考え方が少しでも変わってもらえたかな?と思っております。

日ごろ植木畑にて植木の手入れをしていると下校中の子供達が「植木の先生!また来てね!」と声をかけてくれます。とても嬉しく心が温まります。子供たちのこころの中に「植木」という言葉が沁みてくれて、植物・植木・環境とつながりながら中学・高校・大学と成長し大きくなった時に、「小学校で緑育を習ったから植物が好きになりました。」と言ってもらえる日も近いと思います。現在は、市内小学校2校と緑育出前授業の経験を踏まえ地元の中学校で「平地林の保全整備教育」の授業や、茨城県内の高校3校（造園科又は環境緑地科・内容は主に植木の特性と見分け方・移植や根巻の仕方等）にて社会人講師として授業を受け持っています。小中高と話す内容に違いはありますが、植木（植物）を好きになってもらえることには変わりはありませんし、子供たちの中で植木関係のお仕事に興味を持ってもらえればうれしいことです。このまま緑育出前授業を続けて行けたらとても幸せなことだなと思っております。

小学校での緑育出前授業

中学校での平地林保全整備授業

高校での移植・根巻き授業

真夏のオリンピックでも快適におもてなしするために

GTS らしさを盛り込んだ暑熱対策商品の開発、提案を強化

一般社団法人　緑のまちづくり支援機構

2020年に向けて、暑熱対策が喫緊の課題に

2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、オリパラ）の開幕まで４年を切った。競技会場とその周辺施設の整備に加え、都市として抱えるさまざまな課題解決に向けた取り組みがいよいよ本格化するとみられている。

とくに急ピッチで検討が進められているのが暑熱対策、熱中症対策である。

オリンピックの開会式が行われるのは2020年７月24日。７月から９月というまさに暑さが厳しい期間の大会であり、熱中症に対する懸念が高まっている。言うまでもなく東京の夏の暑さは年々過酷さを増しており、アスリートはもちろん、観客への暑熱対策、熱中症対策が大命題となっている。とくに、海外から訪れる観光客が安全で快適に滞在できる環境整備は喫緊の課題となっている。

そうしたなか、官公庁や関係団体が暑さ対策に関するさまざまな取り組みを進めている。関係府省庁が連携して「東京2020に向けたアスリート、観客の暑さ対策に係る関係府省庁連絡会議」を設置。競技会場等の暑さ対策のほか、暑さ対策に係る技術開発や熱中症対策等に係る予測技術開発等といったさまざまな暑さ対策に取り組むことを平成27年９月に中間取りまとめとして発表している。

また、東京都は2016年夏に「暑さ対策に係る先進技術等実証事業」を実施。リオオリンピック・パラリンピック競技大会期間中に開催された「東京2020ライブサイト in　2016－リオから東京へ－」の会場内（上野恩賜公園）に、公募により集めた暑熱を緩和する設備を設置し、その効果実証を行った。その結果、気温が平均１～２℃程度、WBGT（暑さ指数）が平均１～３℃低減（いずれも速報値）したことを明らかにしており、今後炎天下での屋外イベント会場での快適性向上・熱中症予防を図る先進的取組として情報発信していきたいとしている（**写真１、２**）。

写真１、２
「東京2020ライブサイト in　2016－リオから東京へ－」の会場内にて、日除けやドライ型（微細）ミスト、緑化設備など暑熱緩和のための設備を設置し、暑熱対策の効果実証が行われた

GTS で活発化する暑熱対策の取り組み

当機構でも、2015年度よりオリパラを活動テーマの柱に掲げ、具体的なプロジェクトを始動している。

東京都、2020年オリンピック・パラリンピック東京大会推進室（内閣オリパラ室）、農林水産省などオリパラに関連する行政機関を招いて会員向けの勉強会を開き、さまざまな情報交換を行ってきた。

夏の暑熱対策に特化した専門展「夏の暑さ対策展2015」（主催：フジサンケイビジネスアイ）にも当機構としてブースを３コマ出展。仮設型緑花空間「グリーン・タウン・オアシス（GTO）」（本紙454号で紹介）を中心とした当機構オリジナル商品の実物展示に加え、パネル展示や会員各社のＰＲも行った。会期中は、暑熱対策向け商品である「GTO」に高い関心が集まり、内閣官房2020年オリンピック・パラリンピック東京大会推進室の平田竹男室長らが当機構ブースを視察したほか、ＮＨＫの取材において、“会場内で涼しいスポット”として GTO が紹介される場面もあった（**写真３、４**）。

写真３、４　2015年６月17日～同19日開催「夏の暑さ対策展2015」に出展。
左：平田竹男・内閣オリパラ室室長（写真手前）が当機構ブースを視察
右：“会場内で涼しいスポット”としてＮＨＫの取材を受ける

また、前号でもご紹介した東京・お台場に設置中の「GTO」をベースとしたガーデン「五感の庭～涼しさのおもてなし」も、実はオリパラへの展開を意識して取り組んだ事例である。臨海副都心エリアは周辺にオリパラの競技会場が多く立地し、観光客なども多く訪れる人気のエリアだが、現在のところ避暑休憩所となる空間が乏しく、暑熱対策が課題となっていることが背景にある。

設置中の GTO は、直射日光を分散させるフラクタル日除け、打ち水効果で地表面を冷却する保水性ブロック、植物の蒸散作用により周囲を冷やすゴーヤのグリーンカーテンといった暑熱対策技術を盛り込んでおり、当機構の測定では隣接するアスファルト舗道および芝生上と比較し、GTO 内は WBGT を３～４℃ほど低下させる効果が確認されている。今後も継続設置する考えで、さらに実効ある商品となるようブラッシュアップを図っていく。

涼しく、花と緑を生かした空間提案でおもてなしを

さらに、オリパラに向けては、これまでに当機構が商品化した既存商品の応用・展開も視野に入れながら、“涼しさの工夫”“花と緑の活用”“江戸の風情”をコンセプトに、大会での適応商品や大会後のレガシーも見据えた空間提案のアイデアを検討している（**図１、２**）。現在、オリパラのマラソンコースとして想定されているエリアの道路両脇を緑化するプランづくりに着手しており、関係先への提案準備を進めている。暑熱対策や街なみの景観向上などの観点から、植物が重要な役割を果たすことは間違いなく、ぜひ貴協会からも採用植物についてのご指導やアイデアをいただければ幸いである。

今後もオリパラに向けた世間のニーズをいち早くキャッチし、単なるアイデアレベルにとどめず、会員間アライアンスの強みを生かしながら、当機構ならではの緑化・暑熱対策商品の新たな商品開発につなげていく考えである。

図１、２　オリパラに向けて当機構が提案する空中緑花のイメージ
左：江戸の涼味を演出する五輪しのぶの提案。ドライミスト装置も備え、実効的な涼しさを提供
右：四ツ目朝顔を施したタクシー乗り場。植栽基盤や灌水設備が目立たないように工夫

コンテナ農場（100 万本生産）

コンテナ農場

オリーブ

カンツバキ赤花と白花

主な生産物
クロマツ　コニファー類　ヤシ類
カシ類　クスノキ　タブノキ
モチノキ　ウバメガシ　オリーブ
カクレミノ　クロガネモチ
サンゴジュ　シマトネリコ
マテバシイ　ヤブツバキ　ヤマモモ
レッドロビン　オウゴンマサキ
カンツバキ（赤花と白花）　サザンカ
シャリンバイ　ツツジ類　トベラ
ハマヒサカキ　ヒサカキ　ミカン類
サクラ類　イロハモミジ　ハナモモなど

㈱瀬戸内園芸センター
緑は地球を救う
愛媛県今治市旦甲 248-1　TEL 0898-48-0010（代）　FAX 0898-48-8187
http://www.setoen.com/　E-mail : setouchi@setoen.com

部会だより・青年部会

28年度青年部全国研修報告

青年部会　事業委員長　森　田　直　樹
㈱レコムグリーン・愛知県

9月14日（水）大阪府大阪市のメルパルク大阪にて青年部会全国研修会を開催し、80名が参加しました。

前回が講演会だったので、野外での研修会を考えており、開園10周年でかなり盛り上がっているユニバーサルスタジオジャパンの植栽見学が候補に上がりました。開催できる様に色々掛け合いましたが、入場者の多さや景観の面などで、団体での植栽見学はNGとなってしまいましたが、ユニバーサルスタジオを核施設とする大阪都市計画事業此花西部臨海地区土地区画整理事業に参画された山本兆司さんを紹介して頂いたので、この事業の計画などを話せる範囲で講演していただこうと思い、連続にはなりましたが講演会形式になりました。

「大阪湾臨海地区における開発の様子とランドスケープ植栽」をテーマとし、ユニバーサルスタジオがなぜこの地区（大阪の此花西部臨海地区）に出来たのかという経緯、テーマパークの意義・歴史などの解説、テーマパークでの植栽の意義（テーマになるべく合わせた植栽の仕方や考え方）、2025年の大阪万博が行われるにあたっての大阪湾岸の開発の動きや展望、などを講演して頂きました。

質疑応答では海外と日本側でのデザインの違いをどのようにすり合わせたのかの苦労話や湾岸植栽で塩害に弱い樹木があった場合の対処等、色々な質問に答えて頂きました。

今回の研修会での反省点は守秘義務等の問題で映像がNGだったため、プロジェクターが使えず言葉だけの説明では難しく、イメージしにくかったように思いました。29年度の研修会は反省をいかし、会員の皆様がぜひ参加したいと思えるような企画を事業委員で考えていきたいと思います。

今回の研修会も山本講師、ご来賓の方々、参加していただいた会員の皆様のおかげで、何も問題なく、無事に終えることが出来ました。どうもありがとうございました。

最後に個人的な事ですが、幹事になり、しかも初年度から事業委員長を任されて不安でいっぱいでしたが、メンバー（現幹事）のおかげで楽しく役をやらせていただいてます。この場を借りて感謝いたします。

日本列島植木植物園視察研修

南　林　直　樹
（小岩井農牧㈱・岩手県）

10月13日㈭～14日㈮の日本列島植木植物園視察研修に15名参加のもと行いました。今回は、13日に千葉県匝瑳市周辺の圃場「㈲共種園」・「㈱観賞園緑化」・「㈲川繁園」へ、14日に「ふなばしアンデルセン公園」・「京成バラ園」へ視察させて頂きました。

「㈲共種園」では、2004年から他社に先駆けて海外への輸出、特に中国にイヌマキ（仕立物）や盆栽の配送に伴う梱包技術や方法を教わり、「㈱観賞園緑化」に伺うと、海外輸出しているうえでの、苦労話や安全に配送する職人のこだわり、これからの流通状況など、先を見越した仕入や、日本の職人の仕事に取り組む姿勢をざっくばらんにお話ししていただきました。

㈲共種園　イヌマキ梱包

京成バラ園　園内

「㈲川繁園」では、2007年に品種登録したイヌマキの新種【匝瑳（そうさ）】が2016年の今年より、一般への販売開始における生産現場を見学させて頂きました。この【匝瑳（そうさ）】は、新芽が赤く鑑賞としても良く、耐潮性にも優れ、沿岸部にも良いと思いました。

「ふなばしアンデルセン公園」においては、1987年11月【ワンパク王国】としてオープンし、1996年10月に【アンデルセン公園】として再出発しました。その時期に設計・提案なさった現㈱四季計画事務所の長谷川さんにもお越しいただき、当時の様子を聞きながら、現在従事しておられる花緑係長の藤田さんに園内を案内して貰うという大変贅沢な視察となりました。印象的だったのは、平日にも関わらず約3000人ほどの子供たち賑やで楽しそうな光景でした。四季を感じられる草花を置き、水の音や木陰の有難さなど、自然の恵みが満喫できました。

最後に訪れた「京成バラ園」では、秋でもバラの香り漂う管理された見事な園内での視察でした。案内していただいたガーデン部の村上敏さんからバラの管理の必要性やバラ園を作るうえでの配置や周りの防風対策、薬剤使用についてなど教えていただきました。

今回の研修におきまして思ったことは、各造園者さん、植物園さんともに【変化】に対応して【挑戦】することを恐れずに【継続】しているという3つのテーマを感じました。海外への進出【変化】にかける技術を生み出し、新種【挑戦】を作り人間のより良いライフスタイルを提案し、これらを【継続】するために工夫して管理して次の世代に残そうとする。または、来客者【変化】に真摯に受け止め、恐れずやるべきこと【挑戦】を繰り返し、飽きさせない【継続】アイデアを生み続ける。これはとても勇気がいること、また

㈱観賞園緑化　カイズカイブキ

ふなばしアンデルセン公園

は、労力を伴うことだと思います。しかし、この3つのテーマに携わる各造園者さん、植物園さんから教わったことは、仕事に対する取り組み・姿勢の根底にある考え方が樹木を良く見せ、空間を作り、喜ばれる事につながっていくんだということです。最後に、この視察研修に参加させてもらうことで、日本全国の樹木に関わる人たちと意見や情報を交換する場をいただき次に進めていきたいと思います。ありがとうございました。

13日の集合写真　㈲川繁園にて

㈲川繁園　新品種　赤芽イヌマキ　匝瑳（そうさ）

日本列島植木植物園

ナショナルプランツ　コレクション※

ナンテン
Nandina domestica

確実園園芸場・茨城県　川原田邦彦　㊐029-872-0051

織姫

ナンテン瀧野川

ウルミナンテン

玉獅子

縁起木のトップにもランクされるナンテン。明治時代、最盛期には120ほどの品種が記載されています。現在は残念なことですが、約40品種が細々と残っているほどです。近年、新しい品種が発見されたり、育種をしている人がいたりで、わずかですが増えています（約60品種）。当園では43品種収集保存しています。

※ナショナルプランツ　コレクションとは、世界的に価値のある植物の種・品種等を属のレベルで集め、植物の多様性の維持や希少種・絶滅危惧種の保護に役立てる事を目的としたコレクションです。

リレー連載 うえきのちから ～植木が届ける宝物～

緑百色

株式会社ゴバイミドリ　代表取締役　宮田生美（みやた ふみ）氏

日本の緑

利休緑、柚葉色、柳色、裏葉柳、柳媒竹、若草色、海松色、松葉色、青白橡、花緑青…。

これらは全て緑の色を表す和言葉です。

染色家の志村ふくみさんは緑の色を「緑はその両界に、生と死のあわいに明滅する色である。この世にあっては生命の色、みどり児の誕生の色なのである。」と記しています。

様々な緑が織り成す豊かな表情

水と緑に恵まれた国土にあって、日本人にとって緑は単色ではなく目もあやな多彩な色、季節の巡りと共に移ろう変化（へんげ）の色でありました。

そして、それは命の力を強く印象づける色でもあったと思います。

在来の植物で都市に緑を

５×緑（ゴバイミドリ）は、“里山と連携して、日本の在来の植物で、都市に緑を増やす仕事”をしています。

在来種の混植で緑化したテラス

都市の多くの場所には土がありませんから、植栽基盤をつくるために、金網を用い、保水性の高い軽量土壌を使っています。

在来種を植えるのは、私たちの暮らしから急速に失われる季節感を惜しみ、巡る季節の楽しみやその土地らしさを取り戻したい、と考えたからです。

日本の在来種の４分の１近くが絶滅危惧と知って、ささやかながら里山の植生を守るための活動も続けてきました。

５×緑の緑化ユニットは、里山の景色を写すような心もちで、何種類もの木や草を混植しています。

そうして植えられた植物が織りなす表情と美しさには格別のものがあります。

植物によって葉の色も形も様々です。大きな葉っぱ、小さな葉っぱ、細い葉、丸い葉、葉裏の白い葉っぱ、黄色がかった緑、青っぽい緑―植物が風に揺れ、木漏れ日に輝く様にしばし見とれてしまう自分がいます。

こうした経験をするうちに、冒頭にあげたような日本の緑の豊かさにあらためて気づかされました。

ビルの壁面を飾るテイカカズラ

日本人は長い年月に渡って、緑の繊細な変化を見分ける精緻な目と感受性を培ってきたのだろうと思うのです。

このようにして内面化された自然観が、季節の行事となり、俳句や茶道といった文化に昇華していったのではないでしょうか。また、市井の人々の暮らしに色を添える楽しみにもなったことでしょう。

癒しの力

窓の外の植物を眺めていると自然に心が和み、身体がリラックスしているのを感じます。NATIONAL GIOGRAPHIC 5月号「自然と人間」の特集号の中に「自然に癒される―遠くの原野でも自宅の庭でも、自然に近づけば、疲れきった脳がほっと一息つける」という記事が掲載されています。

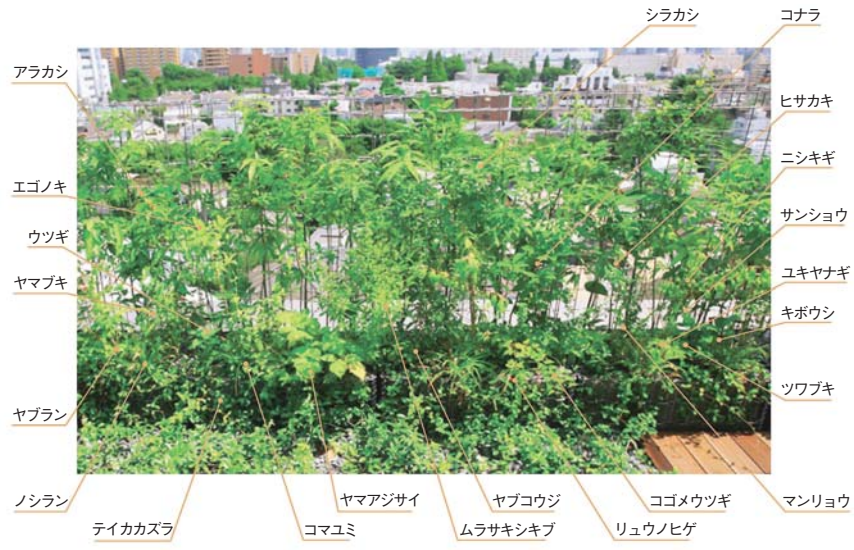
在来種の混植で緑化したオフィスビル

緑地から１キロ以内に住む都市生活者は、うつ病や不安神経症などの病気の罹患率が低いなどのデータも紹介されています。

人工的で均質な都市空間において、有機的で複雑であり、生長したり変化したりする植物が、人に与える影響は思う以上に大きいのかもしれません。

冬芽がふくらんできた、蕾がほころびはじめた、ドングリが青い実をつけた、鳥や蝶がやってきた、そんなことに気づくのは心楽しいことですし、手の平にのるようなささやかな喜びが、ストレスフルな都市生活をサバイブするのに有効な心の動き方でもあるようです。

そして、そのような心の動き方は、昔の日本人なら誰もが自然に身につけていたこと。だからこそその伝統を忘れずにつないでいきたいと思うのです。



日本の在来植物（緑化ユニットに植栽）

宮田　生美（みやた　ふみ）

1991年から㈱アネックスに所属し、旧住宅都市整備公団（現ＵＲ都市機構）のニュータウン開発など公的セクターの街づくりや地域計画のコンサルティング業務に従事。この中で、ランドスケープデザインや環境計画に携わる。コンサルティングだけではなく実際に街に緑を増やすことを企図して、2003年、５×緑（ゴバイミドリ）プロジェクトを立ち上げ。2013年㈱ゴバイミドリ設立。代表取締役就任。
「ウーマンオブザイヤー2010」受賞

香り…雑感。 第８回

イチョウは不思議

足澤　匡（たるさわ ただし）（小岩井農牧㈱・岩手県）

「イチョウ（公孫樹）：*Ginkgo biloba*」の果実は臭い。黄葉したイチョウ並木を散歩するのは清々しい気分になるが、果実を踏んだ後は不快になり、不用意な行動(喫茶店に入る、電車に乗る、など)は絶対に避けなければいけない。また、臭いばかりではない。皮膚がかぶれてしまう成分まで含んでいる。なぜ、あのような異臭がするのだろうか？通常、果肉（イチョウの場合、正しくは外果皮）のある果実は動物に食べてもらうことにより種子散布してもらっているが、イチョウの場合は、アライグマ位しか興味を持たないようである。（アライグマが臭いところを洗い、煎って食べているかは知らない。）イチョウの種子である銀杏（ぎんなん）は、苦みが美味しく酒飲みにはたまらない。滋養強壮等の薬効があるが、気を付けなくてはいけないのは、食べる量である。子供は５個以上食べないように、大人でも40個以上食べ中毒症状を起こした事例があるので注意したい。かつて、地球に君臨していた恐竜が食していたという話があるが、もしかしたら、銀杏の食べ過ぎで絶滅してしまった（？）なんてことはないだろうが、本当に不思議である。さらに、もっと不思議なことがある。裸子植物であるイチョウは雌雄異株であるが、結実の際に精子が発生するのである。植物なのに・・・。

実を踏むと大変なことに・・・

また、東京にはイチョウの街路樹が多く、秋には特に見事な景観を形成してくれるが、もともと防災樹として植栽されたと聞く。大正12年に発生した関東大震災では、イチョウが水を吹き（？）延焼を防いだというのである。「水を吹き」というのは大げさなような気がするが、幹に水を多く含んでいることが防災樹としての効果が高い証明になるかも知れない。最近は、臭い果実のために雌木の人気はなく、雄木が好まれるが、将来あの臭さを知らない人々が増えることが寂しいと感じるのは、私だけでしょうか。

秋の黄葉は見事ですよね

第7回

人間の健康を守る“果樹の力”

NHKラジオ番組「夏休み子ども科学電話相談」などでおなじみの田中修先生にご紹介いただく“果樹の力”。日々のくらしに取り入れて毎日を健やかにお過ごし下さい。

ビワ

甲南大学特別客員教授　田中　修 氏

晩秋から初冬に、咲く花

ビワはバラ科の植物で、英語名は「ロクワット（loquat）」です。学名を「エリオボトリア　ヤポニカ」といい、「ヤポニカ」は「日本生まれの」という意味です。そのため、この果物は、いかにも日本生まれようですが、原産地は中国とされています。

「エリオボトリア」の「エリオ」は「やわらかい毛」を意味し、「ボトリア」は、「ブドウのように房状になる」という意味です。ですから、学名は、「やわらかい毛に包まれた実がブドウのような房状になる、日本生まれの植物」ということになります。

「ビワ」という名前は、実の形、あるいは葉の形が、日本古来の楽器、琵琶に似ているからといわれます。楕円の形の実を「ビワ」という説もあります。日本では、奈良時代に栽培されていたようです。ただ、当時のこの果物は、かなり小粒のものでした。

現在、私たちが食べているような大きさのものになったのは、江戸時代に、中国で栽培されていた種子が長崎にもたらされたのがきっかけでした。これが、「茂木」という品種で、「田中」「長崎早生」とともに、この果物の「三大品種」です。

ビワの花が咲いているのを見られたことがあるでしょうか。ビワはウメやサクラと同じバラ科の植物なので、その花はウメやサクラと同じように、5枚の花びらと、中心部に多くのおしべを持っています。

本格的な冬の訪れを直前にした11月頃に、ビワの花が咲いているのを見られたら、どう思われるでしょうか。地球温暖化の進行を憂い、地球の将来を不安に思われる方が少なからずおられるでしょう。しかし、ビワはもともと11月頃から花を咲かせる植物なのです。寒い冬が間近に迫っているために虫の数は少ないのですが、ミツバチなどに花粉を運んでもらえば、実ができます。できた実は、春から初夏にかけて大きく成長し、6月頃には、おいしい果物となり、私たちを喜ばせてくれるのです。

オレンジ色の色素は、カロテノイド

ビワは、あざやかなオレンジ色の果肉が印象的な果物です。この色素はカロテノイドであり、抗酸化物質のカロテンやクリプトキサンチンなどが主な成分です。そのため、老化を防止し、疲労を回復し、視力を保つことなどに有効にはたらくことが期待されます。ビタミンやミネラルも豊富に含まれており、健康に良い果物なのです。

ビワは果実だけでなく、葉っぱにも、健康を保つのに効果のある成分が含まれています。そのため、昔から、ドクダミの葉っぱ、カキの葉っぱなどと同じように、お茶として飲まれることがあります。

オレンジ色の果皮や果肉、大きな葉っぱとともに、ビワでは、果実の中に入っている大きな種子が特徴です。ビワを食べるときには、これが邪魔になり、もしこれがなかったら、果肉が厚くなるので、「もっとおいしく食べられるのに」と、この種子は不満のタネでした。

2004年、不満のタネが消えた「タネなし」のビワが、千葉県農業総合センターでつくりだされました。世界で初めての「タネなしビワ」の誕生でした。品種の名前は、「希房」とつけられました。。千葉県南房総地方の発展の「希望」を担う「希」と、南房総地方の「房」で成り立っています。

2008年春、初めての「タネなしビワ」が市場に出ました。本来の種子のある部分は、「タネなしビワ」では、小さな空洞になっています。果肉の厚さは、「タネありビワ」の約二倍です。「果汁が多く、肉質がやわらかく、おいしい」といわれ、高値であるにもかかわらず、人気があります。

日本列島植木植物園　ナショナルプランツ コレクション※

モクレン・木蓮①

Magnolia

埼玉県・柴道本店　柴道　昭
㊐048-296-3506

私は木蓮（Magnolia）を300品種ほど作っております。畑で50品種、あとはポット作りです。ポットの場合、やや花は小さいですが、病害虫に強いので、手間いらずの品種たちです。お暇な時に、他の品種も一度ご来店の上、ご覧になってください。

またの機会に、大山蓮花の紅花のオーヤマローズ、ニンバズ、カティエオー（姫泰山木のピンク）等、機会がございましたら、ご紹介させていただきます。

①ハイコブシ
コブシの花とは思えない様な大輪で見事な花です。樹形は横這い性で広い場所に植えたい品種です。

②ミチコレンゲ
大山蓮花の八重咲種。雄しべの紅色が美しい。この種の中に万重咲（千重咲）があり、弁数が50枚以上70枚位ある。

③ポークリアンダブ
大山蓮花の血が入っているのであまり大きくならない。花付き良好。雄しべ紅色。

④白玉蘭
グエネンシス×大山蓮花。
玉になって咲く。雄しべ白色。5～6月開花。11弁あり。香りが強い。

⑤ブラックチューリップ
花付きが良く、若木から咲いてくれます。

⑥オータムクイーン
中型で、花は大輪。秋に良く咲いてくれます。

⑦マクロフィルラ‘アセイ’
ホウノキの仲間ですが、この種は実生から2～3年で花をつけてくれる珍しい品種です。

※ナショナルプランツ　コレクションとは、世界的に価値のある植物の種・品種等を属のレベルで集め、植物の多様性の維持や希少種・絶滅危惧種の保護に役立てる事を目的としたコレクションです。

部会だより・青年部会

北海道・東北ブロック　ドイツ視察

㈲田村山林緑化農園・秋田県　加藤晴喜

この度、執筆依頼を受けまして、稚拙な文章能力ですが弊社の簡単な紹介とドイツ視察のことを、寄稿させていただきます。

フランクフルト園芸センター駐車場

弊社は秋田県秋田市より北へ50km程の沿岸弛に位置しております。

一年の三分の一は冬期間にあたり、県内では積雪量はさほど多くないものの、風の強い地域で主に山林用苗木（広葉樹、針葉樹）とグランドカバープランツを生産しております。グランドカバーは約130品種ほどの主に弊社の風土に適した耐寒性のあるを一年を通して生産、販売をしております。毎年、決まって生産する商品が大半ですが、その年の気候等によって出来上がりが異なり難しいものだと痛感します。将来的には、現状の商品にこだわらず新しい商品や品種にも挑戦するつもりで取り組みたいと思います。秋田県の木である秋田杉について、平成18年頃より試験的にコンテナ苗の生産に取り組み昨年あたりから国有林を中心に植栽が始まりました。コンテナ苗の出荷のあたっては、幼苗の確保、根鉢の充実さ、苗長の良好なもの等が大変重要なことと感じています。秋田県の場合は挿し木苗ではなく、実生苗を使うのでまずは種から発芽する幼苗をしっかり作り込まなければコンテナにいれる元が不足します。そして根鉢の充実さと苗長に関しては、元肥と追肥のバランスと水管理のタイミングが重要です。今年は約15万本を生産しましたので、来年は25万本を目標に頑張りたいと思ってます。秋田杉の生産者は年を追うごとに高齢化や廃業などでかなり減少しており、以前の生産方法では厳しい状況にあります。今後は多様な生産方法、コスト面等、試行錯誤しながら課題をクリアしたいです。今年の7月に北海道東北ブロック青年部の海外研修でドイツを視察する機会をいただき、参加しました。フランクフルト近郊の園芸センター、国立公園植栽、都市緑化等を視察しました。当ブロック青年部の現在の会員は6名と少数ですが、少数なりに団結し例会、研修会を密にし親睦を深めています。情報交換などで指導していただいたりと大変勉強になります。今後は新規会員の増員等、課題はありますが協力し合えればと思います。

国立公園内植栽

フランクフルト
スギのコンテナ苗木

緑育出前授業運営実行委員会 青年部会福岡県支部協力

「子どもたちに緑の存在を」

田　篭　　功（田篭千樹園・福岡県）

10月23日（日）に福岡県小郡市にてアンビネット小郡市地域連携協議会主催の『Let's Go アンビフェスタ―オゴオリ2016―〝豊かな心、幅広い視野、それぞれの志を持ったたくましい青少年の育成〟』が開催され、私たち青年部会福岡県支部も体験型ワークショップのひとつとして緑育出前授業を行いました。

当日は、風も強く小雨まじりのあいにくの天気でしたが準備を進めるにつれ天気も回復し、沢山の方が来場され緑育を体験して頂きました。

緑育の内容として、「知る・見る・ふれる」の三つをテーマとして授業内容を考え、それぞれの授業がつながるよう工夫し、子供たちに緑の存在を知ってもらい　緑をもっと身近に感じてもらえるような授業内容を心がけました。

まず「知る」では、『きになる漢字』を行いました。

そもそも緑育を行うにあたり、まず植物それぞれに名前があることを楽しみながら知ってもらおうとの思いから、1枚の板に木の名前を焼き付け2～3ピースに切断して制作した「漢字パズル」を使用しました。

木へんに春・夏・西・南などを組合せると木の名前になることを知ってもらい、木の特徴なども含め何故その漢字になったのかを小学生レベルで解説を行いながら授業を進めました。

つづいて「見る」では、これまでの緑育でも行ってきた『この木何の木?』を実施しました。

会場敷地内にある木の前でヒントを参考に名前を当てる授業で、実際に大きく成長した木を見て名前や特徴を知ってもらいました。

最後に「ふれる」では、協会本部からの提案でもある「生きた苔玉作り体験」を行いました。

実際に植物や土にふれる事で言葉だけの緑ではなく、緑は生きていること成長することを感じてもらいました。

「この木何の木?」以外の「きになる漢字・苔玉作り」は指導する側になる私たちも初めての経験で、事前の定例会などで様々な意見を出し合いながら、時には夜遅くに苔玉づくりの予習リハーサルまで行い緑育授業に臨みました。受付やセッティングにバタバタした所もありましたが、気の利いた会員がスマートフォンで某CMの「この木なんの木♪」をBGMで流すなどの予定外の行動もあり、支部のメンバーを心強く感じました。

気になる参加者の感想ですが、対象としていた小学生にとどまらず、幼稚園児からお爺ちゃん世代まで幅広い方々にとても喜んでいただきました。またそれ以上に、主催者の方々から「ぜひ来年も」と評価していただき大変嬉しく思っております。

授業には復習が欠かせません。

今回の緑育出前授業を忘れないでほしいと勝手な思いで、参加者には協会パンフレットとセットで苔玉お持ち帰りや支部で準備した「漢字湯のみ」を配布しました。こちらも想像以上に好評につき、1月に高知県で行われる全国総会や2月の青年部会全国総会にて展示したいと考えています。

最後になりますが今回の緑育にあたり、本部緑育担当の西郷さんや協会事務局、福岡県支部親会の皆様にはご理解とご協力をいただき誠にありがとうございました。青年部会福岡県支部メンバーの半ば思いつきから始まった事が皆さまのお力添えにより緑育出前授業として無事終えることができ本当に感謝しています。

出前授業を通して私たちは、子供たち以上に色んなことを学び見てふれあえた気がします。

これからも緑育で沢山の子供たちに笑顔をとどけ、緑の大切さを伝えていきたいと思います。

オリジナル湯呑み

生きた苔玉作り体験

きになる漢字

この木何の木?

集合写真

お知らせ

平成29年度通常総会開催のご案内

平成29年度通常総会を下記の内容にて開催いたします。多くの会員の出席をお願いいたします。

1．開催日　平成29年1月25日（水）
2．会　　場　ホテル日航高知旭ロイヤル
　〒780-0832
　高知市九反田9-15
3．時　　間　通常総会　13：30～
　講演会　16：15～
　意見交換会　18：15～
4．講演講師　栢野　克己
　（零細企業コンサルタンツ）

コンテナ部会 平成29年度通常総会開催について

1．日　　時　平成29年1月26日（木）
2．場　　所　高知共催会館
　コミュニティスクエア
　〒780-0870
　高知県高知市本町5-3-20
　TEL088-823-3211
　FAX088-823-3102
3．受　　付　8：30～
　総　　会　9：00～12：00

青年部会 平成29年度通常総会開催について

1．日　　時　平成29年2月1日（水）
2．場　　所　ホテル名古屋
　ガーデンパレス3階
　〒460-0003
　愛知県名古屋市
　中区錦3-11-13
3．受　　付　12：00～
　総　　会　13：00～15：00
　記念事業　15：00～17：00
　講演：米山みどり
　（元プロゴルファー）
　懇親会　18：00～20：00

新樹種部会 平成29年度通常総会開催について

1．日時　平成29年2月16日（木）
2．場所　弘済会館　〒102―0088
　東京都千代田区麹町5-1
　電話03-5276-0333
3．受付　12：30より
4．内容　通常総会　13：00～14：00
　講演等　14：30～17：00
　千葉大学名誉教授
　新樹種部会顧問　安藤敏夫氏
　㈱常磐植物化学研究所
　柴田忠宏氏
　懇談会　17：30～19：30
　参加費　8,000円
5．締切　平成29年1月31日

会　員　動　向

協会・退会

▷萩原庭樹園（埼玉県）　萩原俊廣
▷北野造園㈱（石川県）　北野慎一
▷㈱芳秀園（愛知県）　三矢芳隆
▷友楽園（愛知県）　友松秀道
▷照農園（福岡県）　手島正信

代表者名変更

㈲小林養樹園（東京都）
▷㊨ 小林博文　㊧ 小林公成
五十嵐種苗園（新潟県）
▷㊨ 五十嵐大輔　㊧ 五十嵐栄一
㈱京都芳樹園緑販
▷㊨ 小島幹央　㊧ 小島義治
㈱瀬戸内園芸センター
▷㊨ 丹下貴啓　㊧ 丹下幸雄

メールアドレス変更

▷㈲タシロ
㊨ info@greentashiro.co.jp
▷㈱青葉造園土木
㊨ muroyosi@amber.plala.or.jp

訃報

五十嵐栄一様（新潟県）
五十嵐種苗園（五十嵐大輔氏の祖父）
平成28年11月16日没　享年86歳

佐藤きみ子様（山形県）
㈱出羽園（佐藤和克氏の母）
平成28年11月30日没　享年91歳

足澤至様（岩手県）
㈱小岩井農牧（足澤匡氏の父）
平成28年12月6日没　享年89歳

石井誠司様（神奈川県）
石井植木（石井豊氏の父）
平成28年12月14日没　享年85歳

職員の主な業務分掌

平成28年12月1日現在

職務＼職員	佐藤	川俣	八木	中村	斉藤
理事会・業務執行理事会	◎				
連絡調整会議	◎				
総務・企画委員会	◎				
東京オリンピック・パラリンピック	○	◎			
東北復興祈念公園関係	○	◎			
花とみどりの出展事業関係	○	○		◎	
広報・普及委員会	○	○		◎	
日本列島植木植物園運営				◎	
緑育出前授業	○			◎	
記念樹等贈呈事業	◎			○	
みどり香るまちづくり表彰事業			◎		
緑化通信・HP管理事業	○			◎	
調査・研究委員会		◎			
供給可能量調査		◎			
品質向上		◎			
地域性植物適用		◎			
未掲載樹種判定会議			◎		
研修・資格委員会			◎		
中央研修会			◎		
アボックカルタ賞選考			◎		
環境緑化木識別検定			◎		
学術委員会			◎		
植生調査関係事業			◎		
名木の認定			◎		
コンテナ部会		◎			
新樹種部会			◎		
庭園樹部会			◎		
青年部会				◎	
総　務	◎				○
（通常総会関係）	○	○	○	○	◎
（表示出荷事業）					◎
経　理	◎				○
対外業務関連（賛助会含む）	◎				○

事務局からのお知らせ

新規採用職員の紹介

12月1日付で採用になりました八木久生（やぎ　ひさお）と申します。

まだ右も左もわからない「ひよこ」ですが、一つひとつ勉強しながら、なるべく早く協会並びに会員の皆様のお役に立てるよう日々汗をかきながら悪戦苦闘しております。

プライベートでは最近、水彩をはじめました。とは申しましても、小学校6年生以降、筆を持っておりませんでしたので、水彩というよりぬり絵といった方がよろしいかと・・・。